

みんな にこにこ

美馬市立江原南小学校 担当教科/1年生担任

角野 由佳

●実践教科: 図画工作/学級活動/生活科 ●時間数: 5時間 ●対象学年: 小学1年生 ●対象人数: 21名

授業実践のねらい

- 日本とモンゴルの生活や遊びには違いがあることに気付き、違いをよさとして受け入れる態度を育てる。
- 家庭生活に関心をもち、家族の一員として自分にできることを考える。

授業実践の構成

時間	テーマ・ねらい	主な学習活動	使用教材等
第1時	モンゴルの友達にお土産をつくらう	・喜んでもらえるお土産を、相手の立場にたって考える。 ・日本らしさを感じるものを考える。	・パソコン・写真 ・色鉛筆・折り紙
第2時	モンゴルって すてきだな	・「モンゴルのもの?日本のもの?クイズ」をする。 ・モンゴルや日本の生活、文化について知り、違いや共通点に気付く。 ・モンゴルの友達へ手紙を書く。	・世界地図 ・パワーポイント ・写真・民族衣装 ・シャガイ ・ワークシート
第3時	シャガイであそぼう	・触ったり、匂ったりしてみる。 ・遊び方を想像する。 ・シャガイ(羊の骨)で遊ぶ。	・シャガイ
第4時	せかいの にこにこかぞく	・「地球家族」を使い世界の家族について知る。 ・「にこにこかぞく」になるためには、どうすればいいか考える。 ・自分たちの家族を、もっと「にこにこかぞく」にするために、自分に何ができるかを考える。	・「地球家族」
第5時	にこにこかぞく 大きくせん	・家族へ向けて「おてつだい宣言書」を書く。 ・友達と発表し合う。 (事後)各家庭でお手伝いに取り組む。	・ワークシート

授業の詳細

第1時 モンゴルの友達にお土産をつくらう

「先生は、夏休みにモンゴルへ行くよ。」と伝えると「モンゴルってどこにあるの?」「朝青龍のおうちがあるところだ!」と興味津々の子どもたち。モンゴルについてインターネットを使い、説明すると「ほくも行きたい!」「お土産を渡したい」という意見が子どもたちから自然と出てきた。



できあがったお土産



ていねいに色ぬりしよう
と…。きれいな絵を描
いて喜んでもらおうよ。

モンゴルにも折り紙が
あるのかな。

モンゴル語で「こんに
ちは」ってどう書くの。

児童の反応

「相手に喜んでもらえるものを」というめあてをもって取り組んだ。子どもたちは終始相手の立場に立ち、真剣にお土産作りを進めることができていた。モンゴルの国旗を図書室の本で調べてくる子や、草原やゲルの絵を描く子もいた。また、日本らしい柄の折り紙を選んだり、自分が七五三の時に着物を着ている絵を描いたり1年生なりに「日本らしさ」を意識しながら活動に取り組んでいた。

【所感】

「相手の立場にたつ」国際理解教育を進めていく中で、1番大切なものではないかと思う。自分の事だけを考えるのではなく、相手を思いやる。ただお土産を考える、作るという活動にしてしまうのではなく、相手意識をもたせることで子どもたちの意欲も高まり「モンゴルのお友達に喜んでもらいたい」という子どもたちの素直な気持ちが、私自身とても嬉しく感じた。

第2時 モンゴルって すてきだな

(1) ねらい

○モンゴルの文化や生活について知らせ、日本とモンゴルのよさに気付かせる。

(2) 展開

学習活動	指導上の留意事項
1 知っている国を出し合う。	○自分たちの知っている国は、欧米諸国がほとんどであることを伝え、日本に近いアジア諸国に目を向けさせるようにする。
2 モンゴルと日本を比べる。	○「モンゴルのもの?日本のもの?クイズ」をさせ、楽しみながらモンゴルの美しい自然や文化に触れることができるようにする。 ○日本とモンゴルの相違点ばかりを強調するのではなく、共通点にも気付かせる。
3 モンゴルの言葉や遊び、民族衣装に触れる。	○民族衣装や遊びを通して言語だけではなく、様々な違いがあることに気付かせる。
4 モンゴルの子どもたちへ手紙を書く。	○日本との違いをよさとして捉えようとする気持ちを深め合うことができるようにする。 ○自分たちの地域のよさにも触れさせる。

児童の反応

モンゴルのもの？日本のもの？クイズ

日本にはこんなおうちないよ。

そらがきれいだね。

日本のうどんにているよ。

日本のおいしいちゃんはお米を作ったりやさいを作ったりしているよ。

おかあさんはぎゅうにゅうを、お店でかっているよ。

日本のきものも、モンゴルのデールも、どっちもすてきな。

クイズの後は「言葉」「家」「服装」「遊び」に絞って、学習をすすめた。

移動式住居ゲルの話をすると「すぐにお引っ越しできていいな」「学校の近くに建てたら遅刻しないね」「わたしだったらだすきなお友達の家の方に引っ越しよ」と盛り上がった。その後、学校が遠いために家族と離れて生活している子(1年生)がいることを伝えた。私自身は、子どもたちから「さみしい」「かなしい」という言葉がたくさん出てくるのではないかと考えていたのだが、実際は「ぼく、一人じゃ料理も洗濯もできないよ」「モンゴルの1年生はすごいな」という意見の方が多く、驚いた。開発途上国に対し「かわいそう」という偏見を私自身が、少なからず持っていることに気付かされた瞬間であった。子どもたちは対等な心でモンゴルを見ていたからこそ、純粋に「すごい」と感じる事ができたのだろう。

モンゴルはぼうしがすてきだね。おもちゃがほねなので、びっくりしました。日本では、おそとでおにごっこをしているよ。七五三のときは、きものをきるよ。

そらがきれかったです。ぼくは緑茶がすきです。

【所感】



モンゴルにも日本にも、きれいなものや楽しいことがそれぞれにあると感じてくれたようだ。「いっしょにあそぼうね」「また日本に遊びにきてね」と、素直な気持ちがこもった手紙であった。

手紙を書いている時に、日本語で書いてモンゴルのお友達が読めるかなと心配している子が何人もいた。お土産作りの時にはそんな心配をする子はいなかった。子どもたちの中で、遠い国であったモンゴルが現実にあるもの、近い存在に変わってきているのかもしれないと嬉しく感じた。子どもたちが一番驚いていたのは、シャガイ(羊の骨)であった。羊の骨で遊ぶことをとても不思議がっていた。話合いが進む中で、モンゴルの人たちが羊の肉を食べるからだと思いつき始めた子どもたち。すると一人の女の子が「骨で遊ぶなんて羊さんがかわいそう」と悲しそうにつぶやいた。その言葉を聞いて、子どもたちは「捨てたらもったいないから」「おもちゃにしたらずっと残る」と一生懸命に考え始めた。「アサガオでリースを作ったのと同じ」と生活科の学習でアサガオのつるを使い、リース作りをしたことを思い出しながら意見を述べる子もいた。アサガオさんに宛てた子どもたちの手紙にも「リースになってずっとそばにいてね」「リースになっても大切にすよ」と書かれてあったことを、私も思い出した。子どもたちの学びは、このようにつながり、ひろがっていくのだなと改めて感じる事ができた。

第3時 シャガイであそぼう

前時では、シャガイに触れたり、遊んだりする時間がほとんどなかったので子どもたちからシャガイで遊びたいというリクエストがあった。



くさいよ。

ひつじのほねに見えないね。

日本のおはじきにている。

児童の反応

子どもたちはシャガイを触ったり匂ったり興味津々だった。そんな中で「うわ！シャガイってくさい」「そんなこと言うたらモンゴルのお友達がかなしむよ」「…ごめん」という子どもたちの会話が聞こえてきた。新しいルールや遊び方を自分たち作り出し、遊びを発展させていく子もいた。実際に遊びを体験することでさらにモンゴルを身近に感じてくれたのではないかなと思う。

モンゴルのおともだちへお手紙を書きました。

ゲルというおうちがきれいでいいね。ぼくもそんないえにすんでみたいよ。ぼくは、ゲームやサッカーをしているよ。日本もおもしろいよ。

日本は、けいどろがおもしろいからいっしょにあそべるといいね。

くわがたやかぶとむしはいるんですか？ すごくひつじをだいにしているんだね。

けいどろがおもしろいからいっしょにあそべるといいね。

二岡 報告書 ① 幸

角野 由佳 報告書 ②

鼻崎 吉則 報告書 ③

川原 恵子 報告書 ④

足立 さち 報告書 ⑤

井上 省吾 報告書 ⑥

【所感】

シャガイは4つの面をウマ・ヒツジ・ラクダ・ヤギに見立てていると基本ルールを説明した時の子どもたちの反応が印象的であった。「そんなの見分けられないよ。モンゴルのお友達はこんな難しい遊びができてすごいな」毎回の学習で必ず出てくる「すごい」の言葉。異文化に対し、「すごい」「きれいだな」と感じることができる1年生、まだ偏見や差別を強く感じることがない子どもたちだからこそ今の段階から、違った文化や考え方があることを正しい知識として伝えていきたいと思う。

第4時 せかいのここにこぞく

「地球家族」を使い、3つの家族の中で「ここにこぞく」だと思う家族をグループで話し合いランキングする。(アルバニア・イタリア・日本)

	1位	2位	3位
1班	アルバニア	イタリア	日本
2班	アルバニア	日本	イタリア
3班	イタリア	アルバニア	日本
4班	アルバニア	イタリア	日本
5班	アルバニア	日本	イタリア

児童の反応

1位にした理由

- アルバニア
 - ・みんな笑顔で楽しそうだから
 - ・みんながくっついていて仲良しだから
- イタリア
 - ・いすやたんすがきれいだから

3位にした理由

- イタリア
 - ・笑っていないから
 - ・子どもが抱っこされていないから
- 日本
 - ・家族が離れているから
 - ・物が多すぎてもったいないから

【所感】

子どもたちに自分の宝物は何かと尋ねたことがある。ぬいぐるみ、ゲーム、カード、かわいい鉛筆、シール…と、物ばかりが挙がった。家族や友達を挙げる子は少数であった。

けれど、この時間に自分にとって大切なものでなく「家族」にとって大切なものに視点を変えると「もの」は、ほとんど出てこなかった。家族にとっての幸せは「みんながなかよし」「みんなが笑顔」という意見にまとまった。そこで家族をもっと笑顔にするために、自分には何が出来るかを考えさせ次時の学習へとつなげた。

第5時 ここにこぞく大きくせん

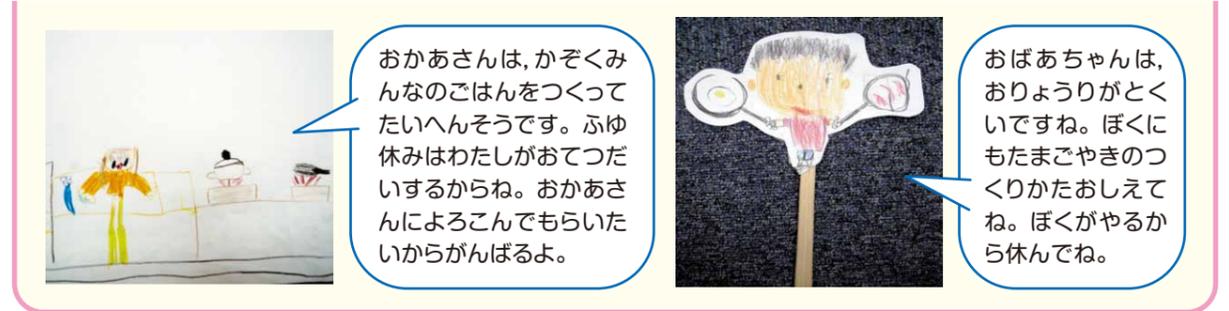
児童の反応

おてつだいせんげんしょ



おとうさんは、いつもじょうずにせんたくをたたんでくれますね。わたしもおとうさんみたいにきれいにたためるようにがんばります。

犬のりんのおせわをするよ。そとはさむいけどがんばります。「ありがとう」っていってもらえるようにするよ。



おかあさんは、かぞくみんなのごはんをつくってたいへんそうです。ふゆ休みはわたしがおてつだいするからね。おかあさんによるこんでもらいたいからがんばるよ。

おばあちゃんは、おりょうりがとくいですね。ぼくにもたまごやきをつくりかたおしえてね。ぼくがやるから休んでね。

【所感】

紙芝居、絵本、ペープサート、粘土…子どもたちは様々な方法で、思い思いに「おてつだいせんげんしょ」をつくった。「毎日大変そうだな」「ぼくが頑張るから休んでいてね」と相手の立場にたった思いやりのある言葉がたくさん見られた。その後、保護者からも「泣きながら宣言書を読みました」「楽しそうにお手伝いをしてくれています」「子ども用の包丁を買いました」と嬉しい報告がどんどん届いている。

授業実践を終えて(成果と課題)

まだまだ自己中心的なところがあった1年生の子どもたちだが本学習を通して、少しずつ「相手の立場にたって考える」ことができるようになってきた。幼稚園の友達に、自分たちが作ったおもちゃで遊んでもらうことになった時も、どうしたら幼稚園の子たちが楽しんでくれるだろうかと一生懸命に案を出し合う姿が印象的であった。自分目線ではなく、相手がどう思うかを考える。小さな1年生が国際理解への大きな一歩を踏み出したと私は感じている。

今までに出会ったことがなかった人、国、文化に出会ったことで視野が広がり、世界への興味が育っている。今、子どもたちの間では世界の国々を紹介した本を図書室で借りてくるのがブームである。教室で、「今日の給食に出たポトフはフランスの食べ物なんで」「頭に壺をのせて運ぶんでよ」と普通に会話が飛び交っているのもおもしろい。文化の違いを「すごい」「おもしろい」と肯定的に捉えることができる純粹さ。これからも大切に育てていきたい。

今回の実践を通して国際理解教育を難しいものだと捉え、遠ざけようとしていた自分にも気づくことができた。しかし実際には、ただ教室に地図を貼っておくだけでも国際理解教育。「相手の立場にたって」友達や家族のことを思いやることも国際理解教育。子どもたちは、どんな小さなことからでもどんどん学びを広げていく。時間が足りない、何の教科・時間に位置付けられれば?と悩むだけではなく、日常生活も含め、あらゆる方向から国際理解へアプローチしていこうと思う。



本校の職員へ向けて研修報告

ぼく、大きくなったら飛行機に乗っていろんな国に行ってみたいな。

アメリカが「サンキュー」っていうのは知ってたけど…カナダも「サンキュー」なんだ!



JICAの地図に夢中

参考資料

【書籍】

- ・「地球家族」ピーター・メンツェル TOTO 出版 1994
- ・「平成21年度 教師海外研修 授業実践報告書集」JICA 地球ひろば 2010